

石川渚

現代日本のエッセイ

問問録

毎日新聞社

現代日本のエッセイ

間
間
録

昭和四十八年七月十五日 印刷
昭和四十八年七月二十五日 発行

定価 一〇〇〇円

著 者 石 川 淳

編集人 浜 田 琉 司

発行人 朝 居 正 彦

発行所 毎日新聞社

〒一〇〇 東京都千代田区一ツ橋

〒五三〇 大阪市北区堂島上

〒四五〇 名古屋市中村区堀内町

〒八〇二 北九州市小倉区紺屋町

印刷 図書印刷

製本 佐久間製本

△検印省略▽

©Jun Ishikawa

Printed in Japan 1973

0395-561012-7904

問
問
錄
目
次

小
知
問
問

莊
子
齊
物
論
篇

風雅

ワビ

花

風景について

蕪村風雅

歌仙

旅二題

仏界魔界

吉備路

雑

雑文について

ジイドむかしはなし

蜀山断片

倫敦塔その他

七

三

三

四

五

六

三

九

五

一〇

一〇

三

安部公房著「壁」序 二四

鷗外全集推薦文 二七

荷風全集推薦文 二九

荻生徂徠全集推薦文 三〇

哀傷

太宰治昇天 三三

安吾のゐる風景 三四

敗荷落日 三六

わが万太郎 三六

三好達治 三六

三島由紀夫君を悼む 三八

文学管見

文章の形式と内容 三九

江戸人の発想法について 四〇

澠江抽齋 二七

北条霞亭 三三

面貌について 二四

孤独と抵抗 二七

芸術家の永遠の敵 二七

本居宣長 二五

対談 歴史・人間・芸術 三〇

著者略年譜 三三

装 幀 安 彦 勝 博

風

雅

ワ ビ

草人木三冊、寛永九年壬申（一六三二）六月刊。草人木はすなはち茶といふ字である。これは江戸の茶事の本として古いほうに属する。わたしは茶事にはさつぱり通じない。またそれをたしなまうなんぞといふ酔興もともと無い。したがって、ここに記すことはわたしの位置が茶の世界からいかに遠いかを示すことにもなるだらう。草人木の著者のなにもものであるかは、専門の学者の考に俟つほかない。この三冊本は茶事の法式について初心の手引のために書かれてゐる。第一冊は行用篇、すなはち「此道数寄執心の輩に於て四季ともに行用すべき大体の旨すべて一百三十一ヶ条」の式目を掲げる。第二冊は座敷、棚、床、その他かざり一般について図をもつてこれを説く。第三冊はおなじく図をもつて台子の沙汰、袋棚のことをいふ。わたしがここに著目するところは、書中とくに謂ふところのワビについて述べてゐる部分である。

○むかしは茶湯に上中下の三段をわけたり。上は其身世にすぐれ或は其身に財あれば名物所持ある故に是を上とす。中は財あれども名の道具に不足なるか、あるひは道具あれども其身まとしければ是を中とす。下は財も道具もまとしき故に下とす。これを侘といふ。然れども、財宝道具ともにとほしからざれども、茶湯下手なれば此道の下とす。たとひわびなりとも此道通達して茶湯に利根なるを此道の上手とす。

さるによつて、いにしへは真壺所持の人は人に御茶可申といひ、真壺不持の佗は御茶可申とは云ざる也。しかはあれども、此道は茶を以て正道とす。何ぞまづぼを持ざるとて正道のことばをうしなふべきやとて、中興より以来上中下をしなべて御茶可申といふ。尤も此儀速に可用。(行用)

開巻まづワビの定義が下される。ワビとは身分上の規定であつた。茶をもつて正道とするとはいつても、道の上手下手に依つて身分の別が定まるのではない。茶の世界に於けるイエラルシイもまた現実の世の中に於ける貴賤貧富のワリツケに対応してゐる。御茶申すべしといふことはワビの使ひうるものではなかつたといふ。草人木の著者が正當に追認してゐるやうに、やがて上中下おしなべてこのことばを使ふに至つたとしても、ワビにとつては、それはことばの禁止が解かれたといふことである。身分に依つて使ふことを許されなかつたことばの例は他にもとほしくないだらう。ただ右のことばの使用がもともと真壺といふ道具の所持と不所持とに係つてゐたといふことは、注意しておいてよい。

茶の湯には亭主と客とがある。招かれた客は約をたがへてはならない。しかし、無断にて遅刻もしくは不参のものにも、なほゆるしがある。いかなる身分のものがゆるされるのか。「主君を持てみやつかへの人か、医師か、旦那持の出家か、あるひは一僕にも及ばざる佗人か、如此のたぐひ」である。「其身数ならざれども、此道する人をばよふならひなれば、佗人など、たとひまちても来らず、あまりをそき故に使をつかはしても来らざる趣申をいふとも、腹立すべからず。」といふ。けだし「茶湯約束して、其期にのぞみて、俄に去がたき用出来して人を待せ、其上に一僕にも不及る者は俄の用ありて左右をいふべき下人も持ざる」がごとき身分のものだからである。このゆるしには由来がある。「天正の比はひおはしませし

やむごとなき御人の御免の一ケ条也。それも一僕なりともある人の事にはあらず。たとひ一僕ありとも、佗人のたぐひはゆるすべし。此吟味は信長天王寺におはしませし時なんぼくの茶湯の歴々とより合ての免の一ケ条也。」といふ。ワビビトがゆるされるのは、じつは「其身数ならざ」るがゆゑなのだから、ここでもやはり身分上のケヂメをくはされたことになる。「免の一ケ条」は一僕をもつかもたぬかといふことに係つてゐる。すでに一僕すらもたない。手もとの道具に事を欠くのもやむをえないだらう。「羽箒と環と棚にかざれとにはあらず。道具もたざる佗より出たるかざりなれば、亭主の心次第也。」とある。そして、事を欠くのはかざりだけではない。「客座につきて亭主茶を立に出る時の衣服を初めと替る事もあり、又はじめと同色をきる事もあり。取去かへたるがよしとは亭主の身上の程によるか。又佗ならば其ままだても苦しからずと、利休公の物語と去人のいはれし也。」とある。ここでもまたワビは「身上の程」を計算されることをまぬかれない。

「こい茶ばかり立て、其儘其茶入にて薄茶をたてず。」といふ。茶入をかへるといふ式証がある。したがつて、道具の吟味があり、主客の作法がある。「勝たる茶入唐物にて薄茶をたてば、忝き思召也といふ心の礼をすべし。名物持の客に古瀬戸のさしてもなきにて薄くたつるにも、客からは先御仕舞被成候へと申べし。一分のたしなむ道具なれば、名物持なればとて、いたかがはは無益也。今焼類なりとも、うやまふ礼はよし。又今焼位の茶入ならば、大事の茶をたくさんといふべし。又高位などの佗に對して、さしたる道具にてもなきに、茶入かへよと仰らるは、茶をたすけ給ふ御言也。佗大名へ茶湯に参りて、御茶入かへさせ給へと申べからず。其時は一生界の思召有難しなど申すべし。佗大名など茶湯に申入て、茶入かへよとあらば、一言にて替べし。苦しからず。佗に似合たる事也。」高位大名の仕打にさからはないことがワビ

の身に似合ふといふことらしい。この身のほどを越えないといふところに、ワビの作法が見つけられる。

○利休公のいへるは、佗の沓分にて所持したる今焼位の道具は、道具持の道具に似たるまじきなれども、其身一分の秘蔵也。其上何たる道具も朝夕みればめづらしからず。たまなれば面白き物也。常にか不時かの茶なりとも、我心に秘蔵の道具は出すべからず。あたらしき道具なりとも、其身一分の重宝ならば、秘して客を請じたる時出せば賞翫になる也。たとひさしたる道具にてあらずとも、二度茶をたつるに、初よき道具にて立、後の道具少不足なる道具出せば、秘蔵の道具に威勢あるか。それもあまねく是非かへよにはあらず。一分に付ての秘蔵の道具の事と云々。尤此儀聞侍也。

ワビの身のほどは高く買つてもせいぜい「今焼位の道具」といふあたりに位取がつけられたやうである。一般に茶湯者の身分は道具に係り、道具に於て当人の一分があつたといふことは、ここにもう一度たしかめておいてよいだらう。

草人木の著者は、さらに第二冊におよんで、ワビの身分上の差別を判然とさせるやうな口吻をもつて叙述をすすめてゐる。たとへば、カコヒの床無きものについて説くにあたつて、つぎのごとくいふ。

○か様な床のなき座敷に付て、当代人毎に大なる誤をいひ侍也。其言を聞に、さしたる道具にてもなき物などにて茶湯する人は床のせばきこそ本なれなどいひ、又は今焼などにて茶湯するすり切佗は一円床のなきこそ似合たるなどいふ人あり。此説一ゑん用べからず。其子細は、いか程すりきりたる佗にても、

茶湯となればいかなる貴人高位も御出なさるゝ。是茶湯の威徳也。下賤の茶湯をあはれみ給ひて貴人高位の御出なされし事、日本に茶の始しより今に至る迄其例を思ふに書つくすべきいとまあらず。是道を道とし給ひし故也。其に付、貴人高位御出の時は、物をかざるばかりにてもなく、色々床に付てならひ口伝ども多し。か様な儀どもをしらざる人の云説用べからず。床ありて惡といふ事もなし。せばき所をかつゝにかこひて床なければ是非に及ざる事也。

ワビにはワビの法があつてカコヒの床を廃したといふわけでは絶対にない。「貴人高位御出の時は」いろいろ床についてならひ口伝が多いといふ事情に依つて、また狭いところをかこはなくてはならぬといふ建築上の要請に依つて、このやうな恰好になつたとある。これはワビなんぞのあづかり知らぬところなのだらう。それにしても、スリキリワビとは小氣味よいことばづかひである。ワビの「下賤」の面目あきらかである。その「下賤」のワビがなほカコヒに立入をゆるされるのは、貴人高位の「あはれみ」に依るといふ。それが「茶湯の威徳」なのださうである。茶席には身分の上下を論ぜざるがごとき体にもてなしながら、じつは貴賤の差別をはつきりつけるといふところに、礼法の仕掛が見てとれる。たとへば釣棚のかざりを叙するくだりに、盆に茶入をのせてかざるにも、茶入のよしあしを問はず、貴賤おのづから道具のあつかひ方の相違あることが示されてゐる。

○是に大事のならひ侍也。たとへば貴人高官の御客なれば、今焼位にても新物にても盆にのせて置事あり。惣而貴高の御客の参る茶具を、いか程いやしき道具にても、畳の上に置事は式目になき事也。殊更しつけ方に大に恥しめたる事也。天目は台に其儘置、茶入を盆にのする事、是は道具なしの茶湯とてあさま

しき佗のわざ也。

本来ならば、天目も台も茶入も、これをかざるときには盆一つに入れて置くことが式目なのではあるが、ワビなんぞは道具をもつことができないので、茶入ばかりを盆にのせるといふ。現実の世の中に於ける下賤のワリツケは、そのまま茶の世界に入つて道具なしといふかたちをとる。そして、これは「あさましき」ものとされる。さういつても、もともと下賤なればこそ、道具をもつことができないのではないか。この関係はあきらかに悪循環である。またこの関係は、道具持の側の利益に於て、逆に茶の世界から現実の世の中のワリツケに通用する。下賤があさましいのか、道具なしがあさましいのか、われわれはこれを知らない。ただこの悪循環はどうもあさましきもののやうである。しかし、つねに道具をめぐるところのこの悪循環の仕掛は、また道具をもつてこれを破ることができる。身分上に於ける茶道具の意味がいかに政治的に利用されたかといふことは、われわれは茶事の歴史の中にその実例をさがすことができるだらう。草人木の著者はさらに貴賤礼法の別について説明の蛇足をつけてゐる。

「茶湯の道に貴人高位をあひしらふと云は」たれでもわきまへてゐるやうな尋常の礼式ばかりではない。なにをもつて礼とするかといへば「道具の取置にて人をたつとむ事をしりぬ。去によつて貴高の御客なればのるまじき天目も台にのせ、すはるまじき茶入も盆にのする。下賤の客なればのすべき天目も下にをき、すゆべき茶入も平地に置は、是上下をわくる次第也。」とある。これでは茶事の眼目であるべき道具が、その道具としての価値に係らず、人間の社会的地位の上下に依つて、いいつらの皮にあつかひ方を逆にされるといふことになる。なにぶんにもすでに茶事には主客の関係がはたらくのだから、道具の美的価値

の有無よりも、貴賤の身分の差別のはうを目安にしたところに社交の骨法を見つけたといふつもりなのかも知れない。美学と処世術とがここに揃みあつてゐるやうである。下賤の側がこれだけ手数をかけたうへで「貴人の御出にあづかるといふこそ茶湯の威徳はあらはれたれ。」といふ。かう肩身の狭いおもひをしてまで「威徳」にあづからなくてもよきさうなものが、「ただ芸能の重宝は且て身上の甲乙のへだてなし。其ぶんざいに似合て道具をたのしみ道を道とする事は、上下ともに同じ。身上の甲乙によりて道具の甲乙をわけば、何ぞ数ならぬ佗の草屋へ貴人高官の何の益あつて来せ給はんや。是にてよく分別して心得べし。」とある。ここの論理はどうも曖昧に聞える。われわれの「分別」では、何とも心得がたい。ただ「道具をたのしみ」といふ一語は、これをうけたまはつておく。

道具をたのしみといふ。そして、「芸能の重宝」のかぎりでは、貴賤の差別は無きにひとしいといふ。さういふ茶の世界とはいかなる性質のものか。草人木の著者は床のかざりの段に至つて「根本茶湯は隠遁者のわざ也。」と記してゐる。隠遁者なるがゆゑに、茶席の床には「祖師先徳の遺をける金言の軸物」をかけるといふ。「東山殿の御式目にも祖師の軸は茶道の正道」なのださうである。「金言」に拘泥せず、「軸」をもつて宗としてゐるところは、さすがに道具をたのしむ「茶道の正道」らしい。すると、茶席の中には、仏法の来世の観念が具象的に設定されたことになるのか。にはかに判じがたい。またとくに仏法と関係させて考へる必要は無いやうである。しかし、何の観念と関係があつたにしても、茶席は現実の世の中に於てそこが別天地であるやうな仕掛にはなつてゐたのだらう。特別の設計に依る建築の中で、特殊の道具を使つて、特定の式目にしたがつて、茶をのむといふ操作をする。そして、さういふ演出に於て生活の意味を発見する。その建築も、道具も、道具の配置もすべて美に関係があるとすれば、この演出はすなはち

生活に於て具体的な美をあつかふ方法であり、そこにできあがつた秩序は美的生活の可視的な形態であるといふことになる。茶の世界についての基本的認識は、今日のわれわれにとつて、さしあたりこれだけで間に合ふ。茶席にをさまつた人間がいかなる觀念を案出しようと、またその觀念の内容がたとへば、美学に、哲学に、仏法に、老莊に、現世の幸福に、人生のひねくれに、商売の取引に、盗人の昼寝に、他のなものに關係しようと、われわれの知つたことではない。まして、美的生活者でもなく、隠遁者でもなく、他のなにものでもなさうな後世の物識博士の捏造に係る茶道講義なんぞは完全に用が無い。さういつても、かつて茶の世界の秩序に生涯を托した人間はともかく美的生活者ではあつたのだらう。またその世界が現実の世の中から分離的に存在するもののやうに考へられてゐたとすれば、それは隠遁者といへないものでもない。しかるに、不都合なことに、茶席の登場人物は主客をもつて構成されるといふ約束になつてゐるのだから、そこには「此道数寄執心の輩」いろいろ、「貴人高官」なんぞも大手をふつてはひつて来る。まさか「貴人高官」のことごとくが「何の益あつて」隠遁者を志願したといふわけでもあるまい。逆に隠遁者ならざる人物の出入に依つて、「此道」は繁昌したといふ実績を示してゐる。このとき、茶席とはなにか。

茶席では、主客の關係を維持するものは、「道具の取置にて人をたつとむ事」を知らしめるやうな「しつけ方」であつた。つまり、相手の身分に依つてはたふとばなくてもよいといふやうな「しつけ方」もあつたことになる。これが茶席の秩序に於ける礼法である。この礼法の図式は道具といふ物体のあつかひ方に依つて可視的に描かれる。ここに描かれた絵図面は現実の世の中の秩序にむかつて物をいふだらう。といふのは、茶席の身分と現実の身分とは道具の媒介に於てペアに通用するといふ為替相場ができあがつてゐる